

オカマのイナコ



老人女装小説 ひかるちゃんの女装物語 連載の1話 作/オカマのイナコ

先の戦争が終結したのが昭和1945年8月15日になるが、このひかるちゃんはこの日にはもう母親のお腹の中にいた。その頃、ひかるちゃんの母親は住吉区に住んでいたが、母親はすでに妊娠を知ってはいた。しかし、連日のB29の空襲で数千発のナパーム弾(大型の焼夷弾)、そして小型の焼夷弾のクラスター弾で大阪市内は焼け野原になっていたが、そんな中でもお腹のひかるちゃんを守っていた。これがいわゆる大阪大空襲で1945年3月13日深夜から翌日未明にかけてに最初の大阪空襲が行なわれ、その後、6月1日、6月7日、6月15日、6月26日、7月10日、7月24日、8月14日に空襲があった。

この大空襲で大阪市民の約1万人が亡くなっていたが、ひかるちゃんの母親は奇跡的に助かり、その終戦のあくる年の1月14日に無事ひかるを産んでいた。このひかるの母親は佐和子といい父親は傷痍軍人として満州から帰還していた僅かの時間に妻を妊娠させていた。そしてそのまま神戸の軍事工場で働いていた。

この大阪大空襲の時の母親というのは度重なる深夜の空襲で逃げまどうという恐怖がお腹の中の赤ちゃんに影響したのでひかるちゃんがオトコオンナ(性同一障害)

になったという母親の説明を今でも信じているという。その母親の佐和子はひかるに、

「生まれた時は2350gと小さかった、それに泣き声も女の子のようだったからこれは将来女の子になるかもとこの長男の息子に「ひかる」という名前を付けたのよ...」と小さいころから言い聞かせていた。

やがてひかるは小学生になるが、この母親の言葉が影響したのか友達といえばすべて女の子であったが、このひかるの両親もこのことはそんなに問題にせず母親の佐和子なんかは積極的に女の子っぽい服を買い与えてその可愛らしさを楽しんでいるようだった。やがてひかるは中学生になるが、さすがにひかるも女の子らしい服には抵抗していた。そして中学、高校と吹奏楽部に入りトランペットを担当するようになっていた。このひかるは楽器の演奏も好きだったが、目的としていたのはオーケストラの指揮者、それにクラシックの作曲だった。

そしてひかるは京都の立命館大学に入学して立命館大学交響楽団に入団している。そしてひかるの最初の学園祭を迎えるが、その時にひかるが希望したのは仮装行列の女装のドレス姿だった。この時がひかるの女装デビューになっていた。しかし、これはあくまでも仮装の女装であったのでひかるが誰も性同一障害だとも思っていない。というよりそもそも世間では「オカマ」とか変態としての女装は認知されてはいたが、今の「性同一障害」という言葉さえなかったことになる。

そしてひかる自身も正式に医師の診断で「性同一障害」だとは認められていないことを正直に話をしている。それにも訳がある、それはひかるの恋愛対象が男性ではなくやはり健康な男と同じように女性が好きだった。いわば少なよなよした小柄な男性としか見られていなかったことが幸いして学生時代には変な噂はなかった。やがてひかるは立命館大学交響楽団、150名の学生団員のリーダーになり、全国大学交響楽団大会で全国制覇の金賞を2回連続獲得していた。

小柄なひかるだが、なにせ全国的に有名な交響楽団のリーダーであるから音楽関係の女性からは随分ともてている。その学生生活の4年間では女性との恋も数回経験している、このころ交響楽団と合唱団、それに他の音楽学部とのジョイントコンサートが頻繁に開催されていた。その中でクラシックのピアノ奏者の青山真紀と仲が良くなっていた。そのころの真希はもうピアノの有名なプロでレコードやカセットテープを出していた。そしてコンサートなどもあり真希の自宅にはその舞台衣装のドレスが山ほどあった。そもそもひかるの女装の衣装の好みはこんな豪華で派手な舞台用のドレスだったからこれを着てみたいと真希に真剣に申し込んでいた。

その真希も最初はこれらを冗談かもと気にしないで着させてくれた、ひかるにすれば心の奥にしまっていた子供のころのあの女心に火が点いていた。しかも小柄なひかると真希は偶然にも服も同じサイズであった。そして化粧までするようになったひかるに真希もこれは少しおかしな男とを感じるまでには日はそんなにかからなかった。ある日、真希の自宅の部屋で両親が外出しているのを見越しての二人は妖しいムードになっていた。この日もひかるは真希のドレスを着ていた、そして真希は、

「ひかるさん、そのドレスと私とどちらが好きなの？」

「いや～もちろん真希が好きだよ～！」

「そう、それならもうこの部屋では私のドレスと下着を身に付けないで！」

「えっ、なんで...」

「私はそんな変態な人とはお付き合いはしたくはないの」

「でもこれは俺の唯一の趣味だと理解してくれたのではなかったの？」

「そう、それは...しかし、私の下着を付けた男の人に私が抱かれるなんてものは夢にも思っ

てはいなかったわ...」

「なら、もう真希の下着は着ない...と約束する」

この日はなんとはなしにこれで二人は結ばれたが、真希の心は白けてしまっていた。ひかるもこの微妙な空気を悟ったのかもう二度と真希とは接触しなかった。

ひかるの学生時代は演奏の練習や年2回の定期演奏会でかなり忙しくてアルバイトなんてものとはとてもできなかった。真希と別れても女装への要求はあったが、この忙しさをなんとか紛らわしていた。幸い、真希とのお付き合いの間に真希のブラジャーとパンティーを3組もくすねていた

のでそのパンティーを密かに身に付けて演奏や楽団の指揮をとっていた。自宅での作曲の時など

はブラジャーとパンティーを付けていた。やがてこのひかるの二歳年下の妹の幸子も兄の性同一障害を理解したのか、ひかるのために女性下着や化粧品まで買ってきてくれるようになっていた。

★...これは小説であり、特定の団体と個人には関係がありません。この小説の関連小説は下記になります。そして掲載の画像はこれら関連小説の挿絵画像になります。

♂ [老人女装...「オカマのイナコ オカマデビュー」...駆け込み寺居酒屋ポン吉 お化けの日 番外編 48話](#)

♂ [働く女性たち...「西大路オールドニューハーフクラブ」オカマのイナコ 結成6人衆 41話](#)

♂ [働く女性たち...「老人女装の玉ちゃん」...駆け込み寺「洋風居酒屋 ポン吉」 21話](#)





老人女装...「オカマのイナコ オカマデビュー」...駆け込み寺居酒屋ポン吉 お化けの日 番外編48話

老人女装...「オカマのイナコ オカマデビュー」...駆け込み寺居酒屋ポン吉 お化けの日 番外編48話

JR西大路駅近くにある「洋風居酒屋ポン吉」は5月3、4、5と連休の予定だったが、この3日だけは女性抜きの「お化けの日」として店を開けてほしいという申し入れが「西大路オールドニューハーフクラブ」の会長の74歳の「ヒカルちゃん」からあった。ところがメンバー6名参加予定だったが3名しか参加できないというのでこの店のマスターの音吉が急遽女装で参加することになった。

店は看板を出さずに「貸し切り」にしていたが、なぜか?飛び入りの中年以上の男たちが怖いもの見たさに集まり店は一時満員御礼状態だった。この女装クラブは音吉を入れて7名にもなったが、このきっかけとは去年の暮れにある一人の老人の客が店に訪れて音吉に女装として店に来てもいいかという申し入れがあったことから始まる。

これがヒカルちゃんですその時は音吉も目が慣れていなかったのか、それはそれはお世辞にも綺麗とは思わなかった。そうこうしているうちにこのヒカルちゃんの被っているウィッグを他の客が被って記念写真を撮ったのが運のツキでこれらの客も化粧をし始めた。この店のママの幸子はこれまた化粧が上手で客に化粧の指導をしたことから6名の老人女装が誕生していた。

これらのウィッグと服はすべてヒカルちゃんの持ち物で聞けばこのヒカルちゃん、これらの衣装を置くためにマンションを一部屋借りている。会社は西大路駅近くにあってその会社の社長さんでもある。自宅は大阪に大きなお屋敷があるが、家を妻や家族から追い出されたのか?、それとも単身赴任かはわからないがこの衣裳部屋で独居老人をしている。

さてその「お化けの日」だが、これはギャラリーも多くて盛り上がった。私も見様見真似で一応化粧はしたが、やはりお化けとしか見えない。いずれこのギャラリーの老人たちもこれに感化されて次の7月の「お化けの日」には10名を超えていると思う。

★...画像はそのお化けだが、これらに嫌悪感を覚える人はここから先は進まないでください。この「洋風居酒屋ポン吉」の場所を知りたい方はこのブログの「コメント欄」に書いてください。





働く女性たち...「西大路オールドニューハーフクラブ」オカマのイナコ 結成6人衆 4 1 話

深夜11時ごろJR西大路駅近くの「洋風居酒屋ポン吉」のマスターの音吉に警察から電話があった。なんでも音吉が経営する「初音第一ハイツ」の101号室のベランダに干されてあった女性の下着が盗まれた、それを偶然向かいのマンションから見ていた住人が110番したという。この101号室を借りているのは老人女装の玉ちゃん(21話)でこの部屋を女装の衣装置き場と着替えと化粧室に使っていた。そこにたまたま女装姿の玉ちゃんも店にいたので音吉と玉ちゃんは部屋に向かっていた。

そのマンションの前にはパトカーが2台とバイクに乗った警察官で8名ほどいた。それに各新聞社のチャーターしたタクシーが数台、もちろん野次馬も50名ほどいる。そこで玉ちゃんが立ち合い盗まれたブラやパンティーの数を警察官に教えていた。74歳の玉ちゃんとの他にも干してあったピンク系の下着との因果関係を刑事らしき人に説明をしていた、玉ちゃんは刑事に、「すいません、これすべて私のものではなくなんというか〜クラブの会員の分も入っています」「クラブって、玄関ドアに書いてある「西大路オールドニューハーフクラブ」のことか?」「はい、この会の会員の多くが妻帯者で家では着替えができないためにこの部屋を借りているのです」

こうして玉ちゃんは警察に被害届をだして解決はしていたが、家主の音吉はこの玉ちゃんらにベランダでの女装の下着を干すことを厳禁していた。この一件まではこの「初音第一ハイツ」のことを地域の人たちはバツイチハイツと揶揄していたが、今回の件から「お化け屋敷」とか「オカマハイツ」と呼ばれるようになっていた。そらま〜夜に化粧して夜出入りするが、なんせ6人がこの部屋を利用しているので夜でも頻繁にこの老人の女装を発見されていたからだ。

この女装クラブの会長は30名ばかりの社員がいる商事会社の社長の玉ちゃんだが、この玉ちゃんのお世辞でも綺麗だといえない女装に感化された店の客6名で組織されたのが「西大路オールドニューハーフクラブ」になる。京都にも女装の店が数軒あるが、それは祇園や木屋町の歓楽街で往復タクシーを乗らなければならない。しかし、この店なら玉ちゃんが借りたマンションまでは徒歩5分程度で近所に住む会員には便利になっていた。

このクラブの会員の2番手に入ったのが、これも妻帯者で60歳のキャサリンになる。このキャサリンも自家用車に女装グッズを隠して密かに楽しんでいたが、ある日、玉ちゃんが女装で店に来たことから長年の夢が叶ったと玉ちゃんの弟子になっていた。そしてこの2人からウィッグを借りて記念写真を撮る男がなんと多いこと多いこと?そしてその中からさらに4名が会員となって

いた。

こうなると不思議な物でこのお化けのような女装が女性客に大受けして店のブログや掲示板で今夜は誰が女装で店に来ると書けばその女装のファンが店に来るということになった。この会長の持論は、

「そもそも、動物のすべては男のほうが綺麗でお洒落になっている。ライオンも孔雀もそうだ、これは子孫を残すためにはどうしても雌の動物に愛されなければならないからだ。しかし、人間社会では男女の賃金差別で女は一人では生きてはいけない。そこで動物と逆転して女がお洒落をするようになった」

しかし、これとはまた違う意見の老人女装もいた。モンローという66歳の女装は、

「私は、ただただ、女性の下着を身に着けたいという欲望というか?性癖になる」

また、69歳のアトムちゃんは、

「私は子供のころから母が目の前でストッキングを履いているのを見て育った。それはそれは綺麗な脚でそれが母そのものだった。その母が亡くなってからあの母の綺麗なストッキング姿にいつかはなりたと思っていたが、その夢が会長のおかげで叶った」

ただ、この6名の中にはいわゆる「性同一性障害」と医者により正式に診断された人はいないしそれにすべて女性と結婚をして子供もいる。しかし、自己診断では私は性同一性障害という人は3名いる。

この店の女性客の中には大手化粧品会社の美容部員も数名いるのでこのオカマ6人集はイオンの中の化粧品売り場や店で化粧の相談や指導も受けていた。さらに、大手のランジェリーメーカーの「フラワー」の社員もいるので年2回開催される社販の入場券をもらい一流メーカーのブラとパンツを市価の10～30%でゲットしていた。

そんなころママの幸子が音吉に、

「マスター、マスターも女装すれば...私が化粧をしてあげる!」

「いやいや、俺はそんな趣味も性癖もない」

「でも、こんなお化け屋敷を認めたのは音吉どんよ!」

「いやいや、それは個人の趣味を尊重しただけで...みんなが楽しければそれでいい」

「それなら1回だけこのウィッグを被って」

と、こんな会話でつい音吉も悪乗りしたのが運のつきでその写真がLINEに掲載された。それを見た女性客から絶賛の声が届きついにこの音吉も「オカマのイナコ」として会員ナンバー7番をもらっていた。その写真が下にある。笑ってやってください。

♥ [働く女性たち...「老人女装の玉ちゃん」...駆け込み寺「洋風居酒屋 ポン吉」 21話](#)

右、玉ちゃん 左、キャサリン



2人とも顔出しOKだが、自粛しました。



初ウイッグを被った日の笑顔・イナコ

働く女性たち...「老人女装の玉ちゃん」...駆け込み寺「洋風居酒屋 ポン吉」 21話

JR西大路駅近くにある「洋風居酒屋 ポン吉」の常連客は最寄りの駅から近い会社の社員は少なくこの地域の商売人や定年退職した中高齢者が多い。この店のマスターの音吉も68歳でそんな地域密着型の居酒屋をしないと6年前からこの居酒屋を始めていた。もちろん当初はホステスさんなんかを雇う気はさらさらなく音吉が一人で料理と接待をしていた。

ところが今ではこの店のことを「キャバクラ ポン吉」と呼ばれるような色気のある店になっていた。そうすると音吉はもう店でする仕事はなくなり開店前にママの幸子から頼まれた料理の材料やトイレトペーパーを買いにいく程度で店が開店と同時に家に帰っていた。その開店前に常連の74歳の玉村芳樹という会社社長が店に入ってきた。

この玉村は玉ちゃんと呼ばれていたが、その玉ちゃん、
「マスター、少し店の中で着替えをさしてほしいと」大きな紙袋を見せている。
店の開店は午後5時半からでまだ30分はあるからと気持ちよく応えていた。

その玉ちゃんはテーブル席に大きな手鏡を置いてなにやら化粧を始めた。玉ちゃんの顔は皺だらけでどんな欲目で見ても「お化け」にか見えない。それを察した玉ちゃんは、
「マ、マスター、今夜は女装の集まりがあって家で着替える時間がなかったので会社から直行してきたの...」

「へ～玉ちゃん、最近ここら辺りで噂になっているオカマちゃんは玉ちゃんだったの?」
「そうかも...でも、善良な市民を脅かすわけにはいかないから私はいつも移動はタクシーなの、そのタクシーを待つ間にパン喫茶のママに見つかって、そのママが客に広めたの...」

そうこうするうちに顔が完成したのか頭にウィッグを付けてこれまた豪華な真っ赤なドレスを着ていた。音吉は何を思ったのかスマホで玉ちゃんの顔や全身を撮っていたが、玉ちゃんはそれを拒否しなかった。そこで音吉は玉ちゃんに、

「あの～これを店の女の子や客に見せてもいいのか?それに店の掲示板にも載せていいの?」
「あらマスターも興味あるの?いいのよ、でも、この格好で店に来てもいい?マスター」
「いやいや、それは個人の自由だからいつでも玉ちゃんを歓迎するよ!」
「それなら、女装の集会の帰りに仲間を誘ってきます。ホホホ」

この話は店の掲示板を通じて京都市内の常連客や近所のこれまた常連のOLたちで店は満員御礼の立飲み状態でこの玉ちゃんの出没を心待ちしていた。もちろん女装といっても綺麗処でないのは掲載された画像でわかるからその期待はなかった。店の前にタクシーが着くとそこから3人の

女装が店に入って来たと同時に全員総立ちで拍手で迎えていた。それを受けるように3人の老年女装はドレスをひらひらさせながら踊るというパフォーマンスに酔いしれていた。それをまた客らはスマホのカメラでパチパチ撮っていたからこの玉ちゃんらの3人は一夜にしてこの西大路駅界隈の有名人になっていた。

その玉ちゃんはある日には普通の姿で現れた。そのカウンターにたまたま同席していた駅前の上場企業でもあるランジェリーメーカー「フラワー」の女子社員がいた。その娘は28歳の詩織で会社では女性下着のデザイナーをしているという。その詩織が玉ちゃんに相談をしていた。

「あの～私も昨日の玉ちゃんらの画像を掲示板で見せてもらいました」

「あらら、そら～お恥ずかしいのを見てもらってありがとう」

「その～実は私の父が私の下着を勝手に履いているらしいのです...なんていうのか...こんなことを他人に相談もできなくて...それで...」

「それで...変態の私に相談ですか?この女装の趣味といっても色々あってネ～私も最初は首下女装でブラとパンティーだけでした。それが妻や娘に見つかって家を追い出されて今は会社近くのマンションで一人暮らしをしています」

「そうでしたの～私も母もあの画像を見て笑ったけれども父を許せません」

「ですよね...私の妻も娘もそうでした。でもね～あの性癖というか趣味はなかなか治らない物です。それでも我慢して下着だけという男性のなんと多いことかと私も感心しています」

「そうなの～だからといって父と母の離婚も...」

「そう、こんなことぐらいで離婚してもお互い不幸になります。どうです一層の事、お父さんの女装を家族で楽しんだら?」

「えっ...そんなこと...」

「でも、さっきは私の女装を笑ったといっていたでしょう。一度、お父さんの女装で笑って見ては?」

詩織がそれなら近い日にフラワー社内販売というのがあってブラやパンティーが市価の10～30%程度で売られるが、その時に詩織がデザインしたブラとセクシーパンティーを数枚買って父に身に付けてもらうという約束をしていた。そして数日後に詩織からメールがあって「洋風居酒屋 ポン吉」で会うことになった。詩織は、

「これ、私のデザインしたブラとショーツなんですけど玉ちゃんとマスターに3組ずつプレゼントします」

当然ながら玉ちゃんは喜んだが、音吉はそれを手に持ちながら顔を赤くしていた。詩織は、

「マスターそれを付けて見て...きっと世界が変わるから」といっている。

そこで玉ちゃんが、

「どうでしたお父さん?」

「そら～娘がデザインした物をプレゼントしたものだから喜んだわよ～」
「いや、そうではなくて、その～あの～」
「ああ～母ね～そら～涙を流して笑いころげていたのよ～父がポーズをとって母がスマホでパチパチ写真を撮る…」
「ほう、それはよかった」
「それに母と私でお父さんの顔を化粧したのよ!ほら、これ」

そこにはこれもお世辞でも綺麗な顔とはいえない詩織のパパがVサインをしていた。そのパパがこの店にも来たいと言っているのですが…

「マスター、玉ちゃんも私の父を仲間に入れてくれますか？」
それには玉ちゃんは大歓迎としていたが、音吉は、
「いやいや、その私はその気はないし…仲間と呼んでほしくはない」
「マスター、何を言っているのその私のパンツを一度履いてから判断して見たら？」
「……………」

その後、この西大路駅界隈では「洋風居酒屋 ポン吉」のことを「オカマBAR」とか「お化け屋敷」と揶揄されていたにも関わらず、この地域に勤める若いOLの大人気の店になっていた。



「洋風居酒屋 ポン吉」マスター・音吉

☆～ナンバーズ3が的中・大当たりする本ができました。←←←大好評～♪

<http://p.booklog.jp/book/19961>

☆☆☆～最新作～天使の恋～美幸...明美...真弓...梨香～4名の恋の物語

<http://p.booklog.jp/book/18772> ←無料でメチャメチャおもしろいぞす。。。

◎「牝狐の誘惑」～1話

全身シャネルで着飾った二十歳前後のホステスさんが、私のタクシーに乗車された。この女性はいつもこの時間この場所から乗るから「毎度おおきに」と言ってタクシーを走らせた。桂東口から南へ、コンビニの上にある四階建てのマンションに車を着けるとそのホステスさん、「運転手さん、すいません、財布をお店に忘れてきました、四階の一番北の部屋ですから取ってきます」

酒に酔っているのかフラフラしながらエレベーターに乗ったのは確認した、やがて女の指さした四階の部屋に灯りが点いた。それから二十分ほど待っても降りてこない。また寝込んでいるなと思いメモにタクシー会社に2800円送れと書いて、もしチャイムを鳴らして起きれば釣銭があると7200円をポケットにに入れてエレベーターに乗った。

四階のドンツキの部屋には鍵が差し込まれたままでドアが閉まっている。念のためチャイムを鳴らすが無反応でドアを開けるとス～と開いた。部屋は1DKで窓際のベッドに女はミニのスカートを持ち上げ、白い長い足を45度開き仰向けで軽い鼾をかいて寝ている。たしかパンティストッキングは粗い網模様だったが、寝ている女の足は素足になっている。私はピンクのビキニバンテニーに隠されたビーナスの丘を人差し指と中指でそ～と頂上から下に擦りたい欲望をグッと抑えて目に焼き付けるだけにした。私は名刺をテーブルの上に置き五分後ドアの外から鍵を取り中からロックして帰った。

次の日、会社でその女から電話があった。お金を払うから日曜日の夕方取りにきてほしい、夕食を準備して待っていると言うので私は喜んで高級ワインを奮発してマンションを訪れた。

その女は「花梨」で22歳。最近不景気で時給も安くて帰りのタクシー代と家賃を払うといくらも残らないとグチを言っている。酒がほどよくまわった頃、花梨が「運転手さん、明日から毎日ここまで送ってくだせんで」と魅力ある目でウインクをしている。私はベッドのピンクの蒲団と花梨の顔を交互に見てから深くうなずいていた。

朝、花梨にもしあの晩、私が襲っていけばどうなった？と聞くと、花梨は笑って、「それは同じこと、結局明日から運転手さんに毎日タダで送っていただけるのですから」

しまった。牝狐に騙されたとは思ったが頬がゆるみ花梨のオッパイをまた甘噛みしていた。

★～嫁姑のHバトル～♪～2話

嫁と姑のバトルは場所と時間を選ばないのか私のタクシーの中でも繰り広げられています。
「K子さん、あれほど私の旅行中に亡くなった主人の仏壇に朝はお茶、夜はごはんを供えて拝んでほしいと言ったのにー」

「いえ、お母さま、私はちゃんと拝みました」

「でも、孫の二人に聞くとお母さんは、お茶もご飯も…」

「それはね、朝はたまたまお茶を沸かさず、夜はみんなで外食したからです」

「ほらみなさい、結局私との約束を守らなかったでしょう」

「いえ、朝はお父さまに「今日はお茶がないから近所の喫茶店でモーニングで済まして、チーン！」そして喫茶店代の千円を供

えたわ。夜は「お父さん、今日は悪いけど外食にして、チーン！そしてお酒も少し飲んでほしいと思って五千円も奮発したのよ、お母さま」

「K、K、K子さん！。仏さんが外出してコーヒーやお酒を飲むの？そんなの初めて聞いたわ…！」

「でも、お寺に賽銭箱もあるし、石仏にも小銭を供えますよ、お母さま」

「もう～なんて罰当たりのことを～ネェ～運転手さん」

と、私に話をふって貰ってもこまります。でも顔なじみの無線のお客様なのでつい本音を！
」

「それで、お父さんはコーヒーやお酒は好きだったのですか？」すると嫁が、

「そらーもう～お母様が外出するのを待っていて私にコーヒーやお酒のお相手をさすのよ～そら～好きなのよね～」

「ケ、K子さん、な、なにが好きなの…！」

「だ、だから～私のいれたコーヒーとか…お酌とか…」

「お、お酌？そんなのいつのまにしていたの…ケ、K子さん！」

「お母様、お母様はご主人をほっという旅行とか研修とかでお家を開けるから…私が～お守をさせていただいたから…ホホホ」

「ケ、K子さん、し、主人となにかあったの？」

「あらお母様、私は何も…でも、お父様は私の胸の谷間を覗いたり、昼寝をしていたらミニのスカートの中を覗かれるだけです、そそ、それに私がお風呂に入っていたら…」

「ゲ…お風呂？で何を？」

「お父様ったら～脱衣所の私のパンティーを…」

「ケ、K子さん～なんてふしだらな～」

「だから、仏さんになっても私がちゃんとサービスをしたげているから…安心してネ、お母様！
」

この会話の後、すぐに目的地に着いたのですが、姑さんは顔を強ばらせ運賃を払う手も震えていました。この二人はどうなったかは読者の判断ですが、私はこんなお嫁さんが大好きです。

★～小野小町の幽霊～★

深夜空車で旧奈良街道を京都へ向かってタクシーを走らせていた。醍醐寺を過ぎた辺りから急に睡魔が襲って来た。少し休憩をしようと小野小町ゆかりの随心院の門前に車を停めて右の窓を少し開けて仮眠の体制に入った。

30分ほども寝たのだろうか何気なしに薄目を開けて見るとフロントガラスが妖しく光っている。その向こうに雲のようなフワフワした白い物体、中心だけ淡いピンクの塊が空中に浮いている。

「ハッ、人魂だ！」と思い起き上がろうとするが、金縛りにあってか目の玉だけしか動かない。人魂はこちらを伺いながら左へ回り、さらに後ろから右側に来た。「やばい、右の窓が少し開いている」人魂はこちらの心が分かるのか、ス～とその狭い隙間から中に入ってきてハンドルに腰掛けるように停止した。

シートを倒して寝ている私の腹の真上になる、すると線香、いや違う何か上品なお香の匂いがして金縛りの身体は少し楽になったが、それでも目と脳味噌以外は完全停止している。

やがて人魂は、大きく膨らみ左右の腕、長い脚、両方の乳房、顔とハッキリ分かる透き通った人間になった。狭い車内でその女はハンドルに腰を掛けて両足を広げ身体を前かがみにした。淡いピンクの豊満な乳房は目の前にある。私は思わず、「スイマセン、貴女は？」と心の中で言う、その女も私の脳に、

「私は、小野小町」

「小野...あの、あのオノノコマチさん？」

「そうです」

「その～小町さんが私に何か？」

「世間では私のアソコの穴がないと噂している、それが悔しくてあの世からでて来た」

「そ、その話は有名です、それで私に何か？」

「お前は最近インターネットなる物でブログ小説を書いているそうな、そのネットでそれは嘘と書いてほしい、さあ～私のアソコを良く見なさい」

はい、分かりましたと小町さんのアソコを見ると、そこには立派な割れ目がクッキリあった。

「はい、ありました」

「見るだけでは穴があるか？ないか？分からない、ほれ指をいれて～」

「はい」と指を入れると、あの懐かしい感触が～♪

「あの～オノノコマチさん～」

「なんじゃ〜？」

「幽霊？〜いや亡霊...失礼！〜その〜コマチさんとHしたら...なんか祟りがあるの？」

「そんなものはないが...なぜか私とHした男は早死にしている〜そう、深草の少将ってというのは一晩に3発、これを一ヶ月続けたら死んでしまった」

「あ〜あの人也有名やね〜それにしても一晩に3発？」

「いやいや、平安時代ではそれが当たり前だよ〜さくらさん。ほれ、遠慮しないで...ほれ...」

というなりオノノコマチさんは腰を下ろしきた。ヌルリという感触が頭のテッペンから足の先まで突き抜けた時、「トントン」と窓を叩く音で目を覚ますと、外には同僚の運転手が、「さくらさん、こんなところでチ〇ポ立てて寝てたら風邪ひくぜ！」

・・・・・・ 2話に続きます。。。 2話は↓

<http://p.booklog.jp/book/17111>

★〜私の小説で自己破産をテーマにしているのがあります。これは主人公を女性にしていますから少しH系ですが、自己破産までの流れが書いてありますから参考になります。とりあえずは裁判所に走りこめば今月からの返済はストップできますから自殺というような最悪のことはなくなります。ぜひ、読んでください。

長編小説「京都フラワーランジェリー物語」

<http://p.booklog.jp/book/16636>

小説「天使の恋」〜7人の天使の恋の物語

<http://p.booklog.jp/book/16980>

短編小説100連発

<http://p.booklog.jp/book/16691>